

## 「早く、正しく」に こだわると決めました。

もう事務所をたたもう。そんな時とある不動産会社の社長さんと食事に行く機会がありました。昔から知っている私の兄貴分みたいな方です。しんどいとか、これからどうしようとか私はあまり人に相談しないタイプなのですが、その時は不思議と思っていることを素直に話せました。仕事が全然うまくいっていない事。事務所をたたもうと思っていること。資格を取れば、なんとかなると甘くみていたこと。認めてもらえたら仕事が自然と増えると思っていたこと。するとその社長さんはすごく意外そうでした。自分では分からないのですが、人から見るとそんなに困っている感じにみえないというか、結構苦労はしているのですが、泥水を飲んでる感じには全然見えない様なのです。私がカッコよさを大事にしていることが余計にそう見えるのかも知れません。私の話を聞いたあと、ことあるごとに、その社長さんはいろいろな人を紹介してくれました。そこから結果的に仕事をいただけるようになり、事務所閉鎖という最悪の状況はなんとか避けることが出来ました。その後も何かと気にかけてくださっているのので、この方には本当に感謝をしています。

出て来たら、仕事が無くなってしまうのです。司法書士の仕事というのは、法律で決まったことを登記しますから、人によつてちがう結果ではなく、結果がすべて一緒なのです。だからオリジナリテイが出しにくい。ではそこで選ばれる価値を作るにはどうしたらいいか？考えたのがスピードでした。会社設立は、依頼を受けて登記完了するまで通常1ヶ月くらいかかりますが、それを1週間で済ませたら、それだけ早く事業を開始できるので喜ばれます。もちろん正確性もあつての上で。そこで「早く、正しく」にこだわると決めました。もう1つは、仕事領域を絞る事。さまざまある司法書士業務の中で「早く、正しく」ナンバーワンを目指す事になりました。ですので、CM等でよく見かける「過払い金」はいつい取り扱っていません。

自分の価値を「早く、正しく」。事業領域を「会社・不動産の登記」と絞りこみ、一番変わったと感じるのは紹介のされ易さです。司法書士の仕事は、一般の人にはなかなか分かりづらい。仕事を紹介して下さる業界の方でさえ、司法書士の違いがなかなか感じてもらえないのです。何なら「みんな一緒」くらいに思われている。すごく悔しい事ですが、ある意味では大きなチャンスとも言えます。自分の価値を明確に出し、その価値に恥じないよう、早く、正しく仕事をしていたら「早く正確に手続をすすめたなら篠原」というブランドが、だんだんと出来上がってきて、誰でもいいから篠原がいいに変化し指名される機会が増えていきました。姫路の先生に「40歳までに顔を売れ」と口酸っぱく言われていたのですが、その40歳まであと1年。ここからしっかり顔を売って、どうしても篠原でないといやだと思ってもらえるようになりたいですね。

## ミスのない美しい 仕事をする事。

自身の持ち味は、0から1を生み出すクリエイティブ能力ではなく、あるものを完璧にこなす能力と思っているのですが、登記はまさにそんな力が求められる仕事です。関係する人が困らないように完璧に仕事をしてバトンをつなげる。ミスの許されない意味、職人的なカッコよさが求められる仕事といえます。また私は、書類の見栄えにおいてもカッコよさにこだわります。これはチェックする法務局の人や、どの立場の人が見ても美しくカッコいい仕事をしたからです。なぐり書きのような文章よりも、美しく丁寧に書かれた文章のほうが読んでいて気持ちがいいですし、お互いが気持ちよく仕事ができる環境を作るのは職業人としての気遣いだと思うのです。事務所の世界観もそういう考えからなのですが、一般的な司法書士さんの事務所っていわゆる応接室みたいなところがある、似たりよつたりの雰囲気なのですが、これも自分なりのこだわりを入れました。せっかくだったらお客さまが訪問して気持ちいい空間の方がいいですし、いつもスーツを着て自分のスタイルを崩さないのも、お客様への気配りです。私の場合は年上や富裕層の方にお会いする機会が多いので、安心を感じてもらい自分自身の世界観を表現する身なりをする事を心がけています。

先日こんな事がありました。とある企業の設立登記をしたのですが、その日が先負だったのです。先負は、厳密には午前が凶、午後が吉と言われてます。だから私は午後に申請しに行きました。仕事の段取りを考えるのと午前のほうが良かったのですが、そこはやはり、美しい仕事をしたかったです。あとから



from IL SARTO

## そこはやはり、美しい仕事をしたかったのです。

聞くと、ご本人も結構気にされていたみたいで、私が午後申請したことを知ってすごく感激してもらえました。その日はどんな日なのかを理解して動く。午前にするか午後にするかの違いですが、このちょっとした違いにこだわりたい。会社を大きくしようとする、当然人に任せていかないとはいけません。でも人に任せて、仕事のクオリティが下がるのは絶対にイヤなのです。「やはり篠原は完璧だ。頼んで良かった」と思ってもらいたい。この10年間で仕事を続けてきて、司法書士に一番大切なのは、プロフェッショナルとしてミスのない美しい仕事をする事にあると感じています。だから売上を目指した安易な拡大はまったく頭にはありません。一見すると違いが出しにくいと言われる仕事のなかで、選んでもらえる価値を作れるのはある意味快感です。どんな仕事か分からない状況で、司法書士を目指したわけですが、結果的には自分の才能が活かせる仕事にめぐりあえたと感じています。

## ダブルを纏った「麗しの仕事人」。

独立された2014年に「会社の顔としての自分の身なり」を整えたいとイルサルトにお越しいただいたのが篠原さんとのご縁のはじまりです。はやくも7年たちましたが、常に冷静であることはなく、自分をきちんともっている、そんな篠原さんの印象はまったくかわることがありません。仕事を仕事としてこなすのではなく、誰からみても美しい仕事をしたいという考えを最初からお持ちでした。「篠原さんの世界観を服にも語らせる」これが篠原さんの装いのテーマ。ありきたりなものではなく、かといって服が前にすぎる

こともない、品格・存在感・美しさを感じさせる装い。そこで最適なのが「ダブル」日本では「ダブルは恰幅の良い人がきるもの」というイメージがありますが、これは全然ちがいます。スーツの生まれた英国は階級社会、貴族、士官など階級と目的で服装が決まられていて、軍士官の制服として使われたのがダブル。だからダブルは非常に堂々とした印象をあたえるのです。スリムで若々しく見える篠原さん、でも時と場合によっては年齢よりも上の風格を感じさせる必要のある篠原さんには最適のスタイルです。

